教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価報告書

（平成２３年度分）

平成２４年９月

北名古屋市教育委員会

平成 23 年度教育委員会点検及び評価報告書

平成 24 年 8 月 1 日
北名古屋市教育委員会

1　はじめに

「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部改正により、平成20年４月から、教育委員会はその権限に属する事務の管理及び執行の状況について点検及び評価を行い、その結果に関する報告書を作成し、議会に提出するとともに、公表するものとされた。なお、点検及び評価を行う際には、教育に関し学識経験を有する者の知見を活用するとされている。

本報告書は一部項目の加除を行ったが、概ね前年通りの項目を上記の法に基づき点検及び評価を行い作成したものである。

2　点検及び評価の対象

平成 23 年度における教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況。

3　点検及び評価の方法

教育委員会事務局は平成 23 年度実績をまとめるとともに、平成 23 年度教育委員会方針に掲げた重点目標について内部で、「必要性」・「有効性」・「効率性」・「達成度」の４視点から点検及び評価を行い教育委員会点検評価書としてまとめ、平成 24 年８月教育委員会にて議決した。

また、この点検及び評価を行うに当たっては、北名古屋市教育委員会外部評価委員の知見を活用した。報告書に委員のコメントを付した。

○評価判定基準

ＡＡ：大変良い。現在の水準で継続する。
Ａ：概ね良い。内容をさらに充実して継続する。
Ｂ：良いが、見直しの必要がある。改善をして継続する。
Ｃ：評価が低く、抜本的な見直しを行うか、廃止をする。

4　点検評価の概要

平成 23 年度は、教育委員会全体で 44 の重点目標について実施した。評価の結果をまとめるとＡＡ評価は６目標、Ａ評価は 35 目標、Ｂ評価は３目標で、Ｃ評価はなかった。

教育委員会では、教育委員の活動としてＡ評価とした。

教育委員会会議は 13 回開催し、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき、委員６人が教育に関する事務の管理及び執行の基本的な方針、教育委員会規則の制定など、教育に関するさまざまな議題 20 件について審議し、教育委員会としての意思決定を行った。また、学校現場の状況を把握するため、学校訪問等の学校行事に参加した。

学校教育課では、ＡＡ評価が３目標、Ａ評価が11目標、Ｂ評価が３目標でＣ評価はなかった。

子どもたちに基礎学力の「習得」「活用」「探究」を徹底するため、非常勤講師の配置及び教師への各種研修会を実施し、学力向上の基礎となる生活習慣や学習習慣を育み、きめ細かな指導を行う等の適切な指導がなされた結果、基礎学力の定着については概ね良好であった。今後、基礎学力をほぼ全ての子どもたちに身につけさせるためには、教員の授業力のさらなる向上とともに、家庭との連携を一層進め、学力向上の基礎となる生活習慣や学習習慣を確実に身につけさせることが必要である。

心の教育については、全ての中学校で１年或いは２年生が職場体験を行い、勤労観・職業観の育成を図り、いじめ克服プログラムによるいじめ対策が進められている等、道徳教育、体験活動が着実に行われ、子どもたちに命と人権を大切にし、夢に向かって生きる心が概ね順調に育っている。

特別支援教育については、各学校、各教員の努力により向上している。しかし、一部に課題も残しており、より一層の物的、人的支援が必要である。

登下校、在校中の安心・安全対策については、積極的に取り組んでいる。

生涯学習課では、ＡＡ評価が２目標、Ａ評価が13目標、Ｂ評価及びＣ評価はなかった。

団塊世代が定年を迎え、多種多様な学習意欲を持った多くの市民が新たに生涯学習に取り組もうとしている。それに応えられるよう、名古屋芸術大学とも連携を図り、多種多様な講座を開講した。

また、地域の教育力を高めるためのボランティア活動支援センターの充実、青少年の健全育成のための青少年センターの設置や、豊かな心を育む芸術鑑賞機会の充実などを目標に掲げ、各種事業を実施し成果を挙げている。

また、図書館については年間50万人を超える多くの市民に利用されており、生涯学習の中核的施設として大きな役割を果たしている。そのため、市民ニーズに即した資料の充実に努め、本に親しむ各種事業を実施した。

歴史民俗資料館は、昭和日常博物館として独自で創造的な取り組みにより高い評価を得ている。また、市民連携の推進や、回想法を進めるための旧加藤家住宅に併設された回想法センターと連携し、「アートプロジェクト」などの事業を実施し、博物館と併せて年間５万人近くの人が訪れ、大きな成果を挙げている。

スポーツ課では、ＡＡ評価が１目標、Ａ評価が10目標、Ｂ評価及びＣ評価はなかった。

誰もが主体的・継続的にスポーツを楽しめる「総合型地域スポーツクラブ」で

は、地域交流の場として、健康づくり、仲間づくりや青少年の健全育成、活力ある地域社会の形成に貢献できた。

スポーツ施設利用では、全施設で約 557,000 人（前年度比 18,000 人：３％減）の利用者であった。主な施設では、健康ドームが前年度比約 8,300 人、４％減、市民グラウンドは、約 400 人、３％増であり、震災の影響からか全体としては利用者が僅かに減少している。現状は、子どもから大人まで様々な人たちのスポーツ・レクリエーション活動が支障なくできるよう市内各施設の有効利用を図っているところではあるが、近年施設の老朽化が目立ち、計画的な大規模修繕が必要になってきている。

５　外部評価

教育委員会

・教育委員会の開催回数等活動状況については、平均的であり概ね良好といえよう。学校現場の状況を的確に把握するという観点から、行事参加をはじめとして学校への訪問回数を増やしたこと、またそのような機会に多くの委員が参加したことは評価できる。継続していただきたい。

また委員の資質能力向上の観点から種々の研修を行っていることも評価できるが、活動上および予算執行状況の透明性という観点からは、これらの研修（特に視察研修）についてはより具体的な情報を記載する必要があるように考える。

学校教育課

〇基礎的・基本的な事項を取得させる習得型及び活用型の授業実践とその検証

・第二パラグラフの「習得型授業による…小学校中高学年にやや課題はあるものの…」の「やや課題はある」はいかなる課題であるかの説明が必要である。

・学校教育法施行規則が示す標準時数を上回る授業時数を確保できたことは、今次の学習指導要領が掲げる理念の一つである「確かな学力」の育成という観点からも評価できる。

国語と算数・数学の学力状況を示すものとして、標準学力検査の結果を記載しているが、ここでの数値をいかに読み説いたのかについては更なる工夫が必要になると思われる。毎年実施しているのであれば、当該年度の成績を学年横並びで観察するのではなく、コーホート別の分析を行う方が、学力の定着状況を把握するという点ではより有効ではないか。そのような分析の上で、スケールを用いた評価は行われるべきであると考える。

〇家庭と連携し、学習習慣や生活習慣の確立と向上

・平日の家庭学習時間について、最も多いのが30分以上１時間未満（全体の38.7%）であった。１時間以上家庭学習をしている児童の割合が32.9%（２時間以上と、１時間以上２時間未満の合計）であることと比較しても、多くの児童の家庭学習が１時間にも満たないことがわかる。民間会社の調査によれば、全国平均はおよそ80分程度となっていることを鑑みると、本市の状況はあまり好ましくないという評価になろう。ただしここで示された数値は学年別で大きな偏りが見られるは

ずである。その点に着目することの方が数字としては意味を持つと考える。
　またこれらの問題は家庭の協力が非常に重要になる。保護者への啓発も含めて取り組まれたい。

〇外国語活動の充実

・これはあくまでも新学習指導要領に従って外国人の人的補強を行ったと述べているだけなので、その結果がどうであったのかという評価が必要である。それなしには来年度の改善は見込めない。

・外国語活動への対応として、小学校に外国語指導助手を配置したことは評価できる。小学校での外国語活動については、新規の活動であるということと相まって教員へのサポートが非常に重要になると思われる。担任と助手とのコミュニケーションがうまくいかずに、授業そのものが外国語指導助手のペースで進んでしまうなどの事例も耳にする。外国語指導助手との円滑な関係構築のためにも教育委員会には、実践的なサポートをお願いしたい。

〇言語活動の充実

・成果が「日常の教室に十分見られる状況にはない」というのは、どのような観点から判断できるのかを説明すべきである。

・言語活動の充実に向けた研修計画を全小学校で実施できたことは評価できる。教育委員会においては、今後これらの活動が通常の授業の中で活かされるように、教員の資質能力向上に向けた機会やプログラムを設けていかれることを強く希望したい。

〇いじめ解消100％をめざすとともに、自己有用感を育成する活動の推進・充実

・このＡ評価は微妙と思われる。Ａ評価が教育委員会の指導の下でのピース・メソッドやピア・サポートプログラムの取り組みの実現だけでないのなら、いじめの高い解決率については、どのような改善でいじめが解決されたといえるのか、その基準を示す必要があるのではないかと思われる。

・ピース・メソッドやピア・サポートプログラムといった新たな取り組みを通じて、いじめ問題に取り組んだ姿勢は高く評価できる。また市内小中学校でのいじめの件数を明確に把握し、その解消に向けた取り組み状況について明示したことも評価できる。いじめの事実を公表することは、ともすれば当該学校ないし教育委員会の悪い点を示すこととして受け止められがちであるが、むしろ現状をゆがめずに把握・報告し、きちんと対処することが、保護者・地域住民との信頼関係の構築・強化という点からも重要であろう。今後ともいじめ発生の事前指導を充実させることで目標が達成されることを期待する。

〇生き方や将来を考え進路を選択する能力や態度を養うキャリア教育の推進・充実

・小学校段階から積み上げ型のキャリア教育を行うことは非常に重要な課題であり、そのような方向性で取り組まれていることは評価できる点である。中学校での職場体験活動は地域との協力関係がなければ難しい取り組みでもあるため、今後も地域と良好な関係を築いていけるよう努力していただきたい。ただし、小学校で行うキャリア教育の具体については明確ではなかったので、その点については明

示してほしい。

○規範意識や思いやりを育成する活動の推進

・学校の決まり（学校の規則）を概ね守ったとする児童生徒が８割強、困っている人を助けたという児童が7割程度、生徒が６割であるという結果から、困っている人を助けるという規範意識の醸成に課題があるとみることができる。

　しかしこれについては、単に規範意識の欠如というだけでなく、思っている・感じていることを行動に転換する上で、何らかの困難や躊躇を感じている児童生徒が少なからずいると考えることもできよう。規範意識の欠如を指摘するという指導ではなく、行動に移すことへのバリアを解くような指導が求められるのではないだろうか。

○読書活動の充実

・朝読書の充実は児童生徒の言語能力を高めるという観点から今後も継続して欲しい取り組みである。それだけにとどまらず、読書週間、図書館祭りや読み聞かせなど、様々な趣向を凝らし、児童生徒が図書と触れあう機会を準備していることは大変評価できるだろう。授業での新聞の活用（NIE活動）や、学校図書館の更なる充実（蔵書の増加、図書館のメディアセンター化等）に取り組み、さらに児童生徒の読書活動が充実するように取り組んでいただきたい。

○授業力の向上

・経験年数の浅い教員を対象とした研修会についてはぜひとも充実させていただきたい。これは正規採用教員だけでなく、常勤・非常勤講師に対しても同様であると考えたい。現状を鑑みるに、実践的指導力の向上のためにはこのような機会を意識的に設けることがなければ、個人の努力にすべての原因が帰されてしまうとも考えられるからである。教師が育つ学校であるために、教育委員会にもより充実した支援の提供が求められている。

○ICT活用力の向上

・「平成22年度に比較して全ての項目において指導能力の向上が見られた」とあるが、これらのパーセンテージが教員の自己評価なのか、これらの能力を測定する何らかのテストを実施した成果なのかが明確ではない。評価がＡＡとなっていることからも、この点については明示する必要があるのではないか。

○教職員評価の推進

・評価が教職員の能力開発及び組織の活性化に寄与したという点でＡになっているけれども、当然その反面、問題点もあるはずである。その解消を今後の課題として、それについての記述がなされるべきである。

・教職員評価の概要や実施上の課題について、もう少し具体的に記載して欲しい。教職員の能力開発及び組織の活性化に寄与したとあるが、どのような能力が高まったのか、どのように組織が活性化したのかを明記して欲しい。Ａ評価の内容が問われるのではないか。

○特別支援教育推進体制の充実

・特別支援教育の充実は現在の学校が対応すべき重要な教育課題であるという認識

を読み取ることができる。学校内外に存在する様々な資源を計画的かつ有効に活用しているといえるだろう。特別支援教育への理解、また特別支援教育について充分な専門性を有する教員を増やすためにも、教育委員会には今後も研修会をはじめとする機会の創出に尽力いただきたい。

〇学校情報の積極的公開

・ホームページは社会と学校を結ぶツールであることから、積極的に更新すべきである。

・ホームページの更新回数が小学校262回であるのに対して、中学校が35回と極端に開きが見られることは気がかりである。ホームページは、学校便りや学級通信などと並び現代の学校にとっては保護者や地域住民に学校の現状を伝えるための重要なツールとなっている。必要な情報に対してすぐにアクセスできるよう、学校内では担当者を明確にし、今以上に更新・保守に努めてほしい。これは学校情報の安全性確保という観点からも改善されるべき課題であると考えられる。

〇学校評価の充実

・各学校の学校評価結果を資料として添付してはどうか。学校評価は保護者や地域住民等への説明責任を果たすという点でも重要ではあるが、同時に学校関係者が現状を的確に捉え次への改善に結び付けていくという志向性を有するものであることが必要であると考える。評価項目を総花的に増やし実態を捉えようとするのではなく、教職員の日常的な業務の延長線上でその方向性を確認できるような学校評価であることが重要だと考える。

〇校舎の耐震化の推進

・市内すべての学校において耐震補強工事が完了したことは大変評価できる。地震をはじめとする災害への対応としてハード面での取り組みについては、これで一定の目途がついたと思われる。今後はソフト面（安全教育）の面で東日本大震災等から得た教訓を活かし、各学校における安全教育の内容を見直していくことが重要であろう。

〇不審者対策の充実

・保護者やスクールガードなど、人による見守りこそが事件事故を未然に防ぐ大切な取り組みであると考える。今後も保護者や地域住民の協力の下で、児童生徒の安全・安心を守っていただきたい。

〇交通安全対策の充実

・自転車乗車中の事故が前年比で減ったことは評価されよう。来年度は小学生の交通事故が無くなるよう、一層の取り組みを期待したい。

生涯学習課

・(5)(6)の箇所の表記については、できれば過去２年度との比較（実績）をし、その上での評価を求めたい。

〇家庭教育のあり方を見つめ直し、地域と家庭の教育力の活性化を図る

・学校の休暇期間に開催された「わくわく体験活動」は様々な分野での体験活動が準備されており、非常に魅力的な取り組みになっている。市内に在籍する小中学

生の総数から考えるともう少し参加者が増えてほしいところではある。同一日に複数の講座を開講し、選択の幅を広げるということも検討されてよいのではないか。参加者数の改善については、「いきいき子育てセミナー」や「きたっこスクール」についても同様に指摘したい。

○ボランティア活動支援センターを充実し、地域の教育力を高める

・ボランティア活動をめぐっては、ボランティアの力を必要としている人に対してそのような力を持っている人をどのように準備するのかということが課題となりやすい。その点において、地域のボランティアを包括的に把握・斡旋する支援センターが存在することは、大きな助けとなろう。これまでの経年変化という観点からは、一定程度ボランティア活動が定着してきたと言えるのかも知れないが、登録数や参加者数はまだまだ増える余地を残しているとも見受けられる。ボランティアへの向き合い方が、今以上に前向きになるような施策が必要なのではないだろうか。

○次代を担う青少年がのびのびと健やかに成長するように、地域社会が一体となって健全育成活動を推進する

・どのような活動を行ってきたのかについての記述はあるが、それらの取り組みを通して、市内の青少年が「のびのびと健やかに成長」したことを示す記述がないのが残念である。例えば、夜間の巡回を通して、徘徊等の非行はどの程度減少したのか。事業実施の適切性を確認するためには必要な情報であると考える。

○青少年団体の育成に努める

・青少年団体への補助金交付を通して、それらの活動が活性化したということは喜ばしい。次年度に向けてどの程度の予算を想定し、その成果がどの程度向上するのかという点についての見積もりを立てる必要があろう。いずれの活動も青少年の健全育成という点で大きな役割を担っている。活動に参加する青少年を増やしていくための努力を願いたい。

○青少年センターの設置

・同センターには警察官・教員のＯＢを配置したと書かれているが、メンタル面での援助も当然必要になることから、精神科医など専門医の配置も十分に顧慮されるべきであると考えられる。

・青少年センターの設置による効果はどこにあったのか。青少年への直接的な効果（例えば、非行の減少等）だけでなく、青少年の健全育成をめぐって関係諸機関との連絡調整が円滑になったなどの点も効果として十分に意味のあるものである。ＡＡ評価と判断された理由についてもっと明確にしてほしい。

○各種講座の充実を図り、生涯学習に関する情報や資料の提供を積極的に推進する

・市民のニーズを把握した上での講座開講は評価できる。23講座に計498人という数字は、経年変化を見てみないとはっきりとしたことは言えない（というのも各講座何人参加することを前提にしていたのかが不明確）が、もう少し増えても良いように思われる。その要因が、対象となる年齢層、開催した時期、講座の内容のいずれにあったのかを吟味する余地はある。

○各種講座の修了者に働きかけて、自主サークル結成を促し、地域連帯意識の醸成を図る

・自主サークルの結成はとても時間のかかる事業であると見込まれる。しかし、生涯学習という観点からはとても重要な取り組みともいえる。ぜひ今後も継続していただきたい。

○市民が気軽に芸術に接することができるよう、名古屋芸術大学との連携により、芸術を鑑賞する機会の充実に努める

・地域の大学が持つ強みを的確に把握し、それを活かすことは地域とともにある大学という点からもとても重要な取り組みであると考える。ぜひ今後も継続し、またさらに多くの市民の参加を呼びかけながら、市民の芸術鑑賞の機会創出に努めてもらいたい。

○芸術文化の中心施設として、文化勤労会館の有効活用を図るとともに、市民ニーズにあった事業を実施する

・１日当たり386人もの利用者を迎える文化勤労会館は、本市における芸術活動の発展において欠かせない施設になっていると評価できる。オーケストラや吹奏楽団など適切な施設がなければ十分な活動を行うことが難しい団体のニーズをしっかりと受け止めているといえるだろう。これからも多くの市民に愛され、親しまれる事業・施設運営を展開していただきたい。

○図書館を市民の文化生活の足場にする

・図書館は幅広い世代の市民にとって重要な学びの場である。その点で、新刊も含め幅広い年代、種類の蔵書を備えることは重要になろう。市民１人当たりの利用数を伸ばしていくためにもこのような視点での取り組みを継続していただきたい。

○利用者から求められた資料は、すみやかに提供する

・館内に所蔵していない資料の購入または相互貸借が円滑に行われることは、図書館が学びの場として機能するためには非常に重要であると考える。利用者のニーズにいち早く対応した図書館の運営方針は高く評価したい。

○児童と本を結びつけ、読書の喜びを提供する

・児童期から本に親しむことは、学齢期以降の読書習慣の形成や言語能力の発達という点においてとても重要な取り組みである。今後も児童書の蔵書を増やし、本が好きな子どもたちを育む地域のセンターとして有効に機能し、続けることを強く期待する。

○特別展・企画展の充実を図り、資料の公開を積極的に推進する

・歴史民俗博物館に市内外より、年間36,990人もの来場者があるということは、当施設が歴史・文化活動において広く重要性が認知されていることの証左である。また市民にとって身近な学びの機会を提供していることも評価できる。今後も市内外にその存在意義を十分に示すことができるような運営を続けていただきたい。

○貴重な文化財を後世に伝えていくことの大切さを広く伝えることにより文化財保護を推進する

・文化財保護の視点から小学校等において出前授業を実施したことは面白い取り組

みといえるだろう。学校教育においても、伝統や文化、地域の歴史について関心を育むことは重要な課題である。北名古屋市がどのような文化を背景に持つ土地であるのかの理解を促し、北名古屋市を誇れるような児童生徒を育成するためにも、本事業については継続的に取り組んでいただきたい。

〇回想法を用いて高齢者のケア、介護予防事業に取り組む

・本事業は既に10年間の歴史を持ち、また他課との連携の下で実施されていると伺った。高齢者が元気であり続けるための施策である事業理念からも、継続的に取り組むべき事業であると判断できるだろう。

スポーツ課

〇親子水泳教室

・７月26日～29日の４日間に保育園・幼稚園年中児から小学校３年生までを対象に市民プールで行われた。参加者数30人は、当初の目標と比してどの程度の割合になるのかわからないが、教室の目的に照らして考えると適正な人数であったと言えるのではないだろうか。参加者に対するアンケートであるが、設問内容についてはもう少し工夫した方が良いと考える。たとえばアンケートに自由記述を取り入れることで、より明確に市民のニーズを把握することができるように思う。

〇少年・少女バスケットボール教室

・競技を始める段階でトップレベルのコーチから指導を受けることは、しっかりとした基礎技術を獲得するという点からも意味のある取り組みであると思われる。アンケート調査で満足度をしっかりと把握するように工夫すれば、より一層小中学生のレベルに合った教室にすることができるのではないだろうか。

〇市民体育祭の運営が充実するよう支援する

・市民が一堂に会してコミュニケーションや親睦を深めることは、絆の重要性が改めて説かれる現代において非常に重要な取り組みであると感じた。スポーツを通じた異年齢間のコミュニケーション活性化という点も視野に含んだ取り組みに拡げていくとよいのではないだろうか。

〇愛知県市町村対抗駅伝大会への積極的な参加を図る

・駅伝大会に参加した結果と次年度に向けた課題・意気込みについても記してもらいたい。また代表者を選考するために採りうる方策についても検討しておくことが重要ではないだろうか。

〇体育協会組織の充実をめざす

・定期的に常任理事会や理事会を開催し、活動内容や組織の充実を図ったことを確認することができる。延べ11,119人の参加ということからも、活動の盛況ぶりがうかがえる。地域の体育・スポーツ振興のためにも、今後とも活躍を続けていただきたい。

〇レクリエーション協会活動の充実を図る

・協会が主体となったイベントを開催するだけでなく、自治体をはじめとする多くの団体に講師を派遣・出演させるといった取り組みを行ったことは評価できよう。地域でのレクリエーション活動の更なる発展のため、今後もこのような活動を継

続していただきたい。

〇ふれあいスポーツクラブの育成に努める

・全部で６つのスポーツクラブがそれぞれに充実した運営を行っていることを確認することができた。短期的なイベントだけでなく、定期的なクラブ活動をも運営するためには、難題も多いことと推察する。市民のニーズを的確に把握しながら、より充実したクラブの運営を期待したい。

〇体育指導委員（スポーツ推進委員）及びスポーツ振興委員（スポーツ地域委員）の育成に努める

・指導者の確保については、当面する計画とそれにおける達成度の記述を求めたい。

・指導者養成講習会の内容、研修の内容についてどのように工夫したのかについて明記していただきたい。

〇社会体育施設を拠点としたスポーツ活動の推進

・社会体育施設の年間延べ利用者数の表については、やはり過去２年度との比較をした上で、評価を加えることが望ましい。

・総合体育館利用者への満足度調査によると、最も回答の割合が高かったのは、「普通」という回答であった。満足度は決して低いとは言えないが、健康ドームと比較した際に、その満足度の違いは歴然である。満足度を押し下げている要因を明確にすることで、さらなる施設・運営の充実が図れるだろう。

〇学校施設を市民のスポーツ活動の場として開放

・開かれた学校づくりという観点からも、学校施設を地域の人々の学びの場として提供することは重要な取り組みであるといえる。今後も利用者数を伸ばすことができるように、市民が利用しやすいシステムづくり、利用を促すサークル活動等の組織化などと併せて取り組みの方向性を考えていただきたい。

全体を通して

・北名古屋市の教育活動については、その精力的な取り組みがうかがえ、またデータ上の数字からも標準を上回るものが多く、全体としては良好であると判断できる。

　ただし教育委員会の自己評価が一層の説得力を持つには、さらにきめ細かい点検・評価が必要である。例えば、新学習指導要領に従って制度的に充実したといっても、その結果がどうであるのか、当面一年の評価であっても、それを記述し説明することが肝要である。

・評価が「担当者の実感」に強く支えられているという思いを強く持った。厳密な評価に取り組もうとすることで、いたずらに業務が煩雑になってしまうことは、当然ながら決して望ましいものではない。しかし評価は対外的な説明責任を担うものである。その点からは、評価に至った明確な論拠が欲しい。それは何も数値目標を設定するということを強要するものではない。前年度までの取り組みや評価の過程で指摘されたことは何だったのか、それを受けて本年度はどのような目標を立てながら具体的に取り組んだのか、その結果はどうだったのかということを、数字の上がり下がりではなく文章で表現してまとめる。この一連の作業が、

説明責任を果たすということに留まらず、地域の教育改善に資する教育委員会評価を生むものと考える。
そのためにも評価項目は十分に精査する必要があろう。昨年度までの取り組みを受けて、今年度は何に重点をおいて取り組もうとするのか。既にルーティン化した、もしくは複数年にわたり十分に目標を達成している内容についてはあえて評価項目化しないということもあり得よう。教育委員会としての活動の方向性を省察する機会として、本評価活動を活かしていただきたいと思う。

外部評価委員　橋本裕明：名古屋芸術大学副学長
照屋翔大：愛知東邦大学人間学部人間健康学科

6　おわりに

教育事務の点検・評価は、過去にいただいたご意見等を踏まえ実施し、教育委員会として改善策の方向性を再確認した。また、新たに必要とされる視点もあった。これらのことを今後の教育行政に生かし、北名古屋の教育の充実に努めていきたい。

平成 23 年度 教育委員会点検及び評価書

Ⅰ　教育委員会

教育委員の活動状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

(1) 教育委員会の開催状況

教育委員会会議　　10 回
教育委員会協議会　　３回
議案　　20 件

(2) 教育委員会委員の主な活動

行事名	回数等	延べ人数
委員研修会	１回	６人
視察研修	２回	10 人
愛日地方教育事務協議会	６回	12 人
入学式・卒業式	16 校	21 人
学校訪問	８校	15 人
運動会・体育祭	11 校	11 人
学校経営状況調査会	１回	６人

Ⅱ　学校教育課

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図るとともに、それを活用する能力の向上を図る

ア　基礎的・基本的な事項を取得させる習得型及び活用型の授業実践とその検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

全ての学校において、学校教育法施行規則に示された標準時数を上回って授業を行った。

習得型授業による基礎基本の習得や活用型授業による読解力・思考力の育成の状況を標準学力検査により検証したところ、小学校中高学年にやや課題はあるものの概ね良好であった。今後は、全ての学年で良好な状況を実現する必要がある。

平成 23 年度における授業日数及び授業時数（平均総授業時数）

区　分	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３
授業日数	199	198	198	198	199	196	199	199	189
授業時数	901	949	986	1,019	1,021	1,003	1,047	1,038	994
標準時数	850	910	945	980	980	980	980	980	980

平成 23 年度標準学力検査による定着状況

国語の定着状況

学　年	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２
基礎基本	99	95	79	89	71	87	89	93
読解力等	87	81	70	80	83	73	92	95

（標準学力検査「目標基準準拠観点別学習状況到達度診断」による十分満足と概ね満足の者の割合：％、中３は実施せず）

算数・数学の定着状況

学 年	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２
基礎基本	97	96	88	81	77	85	85	85
思考力等	88	90	87	75	69	69	71	66

（上記標準学力検査による十分満足と概ね満足の者の割合：％、中３は実施せず）

イ　家庭と連携し、学習習慣や生活習慣の確立と向上・・・・

評価	B

家庭学習を自分から進んでしている小学生は､｢進んでしている｣｢まあまあしている｣を合わせると 75.2%になるが、自主学習をまったくしない小学生も 13.5%いる。また、家庭での平日の勉強時間が 30 分未満の小学生は 28.4%、休日の勉強時間が 30 分未満の小学生は 44.0%という状況にある。

家庭学習を自分から進んでしているか

区　　分	(%)
進んでしている	31.7
まあまあしている	43.5
あまりしていない	18.4
まったくしていない	6.4

宿題以外の学習(自主学習)をしているか

区　　分	(%)
進んでしている	29.8
まあまあしている	35.2
あまりしていない	21.5
まったくしていない	13.5

平日に家庭学習をする時間はどれくらいか

区　　分	(%)
２時間以上	10.0
１時間以上２時間未満	22.9
30 分以上１時間未満	38.7
30 分未満	22.7
しない	5.7

休日に家庭学習をする時間はどれくらいか

区　　分	(%)
２時間以上	11.1
１時間以上２時間未満	17.1
30 分以上１時間未満	27.8
30 分未満	24.9
しない	19.1

平日に家庭学習をする時間はいつ頃ですか

区　　分	(%)	区　　分	(%)
帰宅～午後６時	35.7	午後 10 時以降	3.5
午後６時～８時	23.1	決まっていない	29.7
午後８時～10 時	8.0		

ウ　外国語活動の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

平成 23 年度から学習指導要領が改訂され小学校５・６年生に外国語活動が導入された。小学校 10 校に３人の外国語指導助手を派遣し、実践的なコミュニケーション能力の素地の育成を図った。

外国語活動の総時間数

小１	小２	小３	小４	小５	小６
11	11	53	53	356	356

エ　言語活動の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	B

新学習指導要領が本格実施された小学校では、年間の現職研修計画に「学び合い、伝え合い」を位置づけ、国語を中心にほぼ全ての教科で言語活動の充実に取り組み、概ねできたと答えている。しかし、その成果は日常の教室に十分見られる状況にはないのが残念である。今後、一層の指導の充実を望む。

(2) 体験活動を充実し、社会性を育成し、命と人権を大切にし、夢に向かってともに生きる心を育てる

ア　いじめ解消 100%をめざすとともに、自己有用感を育成する活動の推進・充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

各校は、いじめ問題の克服に向け、国立教育政策研究所生徒指導研究センターの支援を受け、教育委員会の指導のもと、ピース・メソッドとピア・サポートプログラムに取り組んだ。

平成 23 年度において、小学校では 751 件のいじめを把握し、そのうち 750 件が解決した。残りの１件は指導後の見守り中である。中学校では 165 件のいじめを把握し、その内の 162 件については解決した。残りの３件については指導を継続している。

イ　生き方や将来を考え進路を選択する能力や態度を養うキャリア教育の推進・充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

小・中学校ともに、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等、全ての教育活動を通して発達段階に応じたキャリア教育（従来の「進路指導」を小学校段階から実施し、適切な進路選択能力を育む教育）を推進した。特に中学校では、中学校１年生或は２年生が３日間の職場体験活動を行った。

職場体験活動実施人数:746 人(クラス数:22 クラス)　受入協力事業所数：214 箇所

ウ　規範意識や思いやりを育成する活動の推進・・・・・・・

評価	B

人としてしてはいけないことなど社会生活を送るうえで人として持つべき最低限の規範意識や思いやりなどの道徳性を培う道徳教育は、道徳

の時間を中心にして、全ての学校で実施してきた。また、非行防止教室等も全ての中学校で実施した。

小学校６年生で去年１年間「学校の決まりを概ね守った。」とする児童の率は85%であった。同様に中学校２年生では「学校の規則を概ね守った。」とする生徒の率は88%であった。また、「困っている人を助けた」という小学校６年生は74%、中学校２年生は63%であった。

約１割の児童生徒が「学校の決まりを守れなかった」とし、約３割の児童生徒が「困っている人を助けなかった」としている。規範意識や思いやりの心が希薄な児童生徒がおり、指導の強化を図る必要がある。学校の道徳教育の充実を図ることはもちろんであるが、家庭での教育が必要不可欠であり、啓発活動を充実・強化する必要がある。

エ　読書活動の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

10 分から 15 分位の朝読書を全ての小・中学校が実施している。ほとんどの小学校が週１回の実施で毎日している学校も１校ある。中学校においては全ての学校で毎日実施している。

また、小学校では年１・２回の読書週間、図書館祭や読み聞かせ等各学校がそれぞれ工夫を凝らして読書活動に取り組んでいる。

(3) 教育の専門家としての自覚を高め、実践力・指導力の向上を図る

ア　授業力の向上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

学び支援事業の一環として教育委員会主催による少経験教師を対象に授業研究会を５回実施し授業力向上を図り、延べ 72 人が参加した。また、全ての学校が、それぞれにテーマを持ち講師を招聘し校内授業研究(OJT)に取り組み指導力向上を図った。なお、指導主事が全校を訪問し、指導助言を行った。小学校においては、１校当たり平均 3.4 時間の授業研究を 11 回行い、延べ 1,560 人（教員数：275 人）の教員がスキル・チェックを受け、スキル・アップを図った。中学校においては、1 校当たり平均 2.6 時間の授業研究を８回行い、延べ 456 人（教員数：157 人）の教員がスキル・チェックを受け、スキル・アップを図った。

イ　ICT 活用力の向上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	ＡＡ

全校に ICT 環境が整えられたので、ICT 機器を活用し「わかる授業」や情報モラルの育成に取り組んだ。全ての学校で、全ての教員が ICT を活用した指導を実施できることを目標とした。教育委員会では情報機器の使い方、セキュリティーについての研修会を実施し、各校では情報教育の指導計画を作成するとともに、研修会を行った。

平成 22 年度に比較して全ての項目において指導能力の向上が図られた。

ICT活用指導能力を有している教員の割合　　(%)

区　　分	大項目Ａ	大項目Ｂ	大項目Ｃ	大項目Ｄ	大項目Ｅ
北名古屋市23年度	92.6	90.3	89.8	91.4	94.1
北名古屋市22年度	70.4	54.0	54.3	65.8	64.9

大項目Ａ：教材研究・指導の準備・評価などにＩＣＴを活用する能力

大項目Ｂ：授業中にＩＣＴを活用して指導する能力

大項目Ｃ：児童（生徒）のＩＣＴ活用を指導する能力

大項目Ｄ：情報モラルなどを指導する能力

大項目Ｅ：校務にＩＣＴを活用する能力

ウ　教職員評価の推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　評価　Ａ

管理職による面接時間の確保等に課題はあるものの、全ての学校で実施した。教職員の能力開発及び組織の活性化に寄与した。

(4) 信頼される学校づくりを進める

ア　特別支援教育推進体制の充実・・・・・・・・・・・・・・・　評価　ＡＡ

全ての小・中学校に特別支援学級を設置するとともに、全小学校で通級指導教室を開設し、さらに、全小学校及び２中学校に特別支援員を配置している。

また、全ての学校に特別支援教育校内委員会を設け、特別支援教育コーディネーターを配置し、推進体制の充実を図っている。各学校では、専門家を招き、障害児事例研究会等を行うとともに、小学校では、延べ697人、中学校では延べ170人の教員が特別支援教育研修を受講し、スキル・アップを図った。

さらに、個別の指導計画を特別支援学級はもとより通常学級においても全ての小・中学校で策定している。同様に個別の教育支援計画を通常学級において策定している小学校が10校、中学校が５校であった。

（特別支援教育：教育上特別の支援を要する児童生徒に、困難を克服し自立を図るために必要な教育）

イ　学校情報の積極的公開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　評価　Ａ

各小・中学校が独自にホームページを作成し情報を公開している。平均更新回数が小学校で262回、中学校で35回であった。

小学校に比べ中学校での更新回数が少なかった。

ウ　学校評価の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　評価　Ａ

全ての小･中学校で学校評議員が参加して評価書を作成し、学校のホームページに掲載し公開している。

(5) 家庭・地域との連携・協働を図り、子どもの安全・安心を推進する

ア　校舎の耐震化の推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	ＡＡ

鴨田小学校校舎、白木小学校校舎、熊野中学校校舎の工事を行い、全ての学校で耐震補強工事が完了した。

イ　不審者対策の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	Ａ

防犯ブザーを小学校入学時に配付した。さらに、全児童生徒が通学時に所持し、使用できるように定期的に点検・使用法等を指導した。小学校では保護者やスクールガード（385 人）による付添登下校、見守り、見回りなどの不審者対策を実施した。なお、平成 23 年度の北名古屋市内の不審者情報は 36 件であった。

ウ　交通安全対策の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	Ａ

全小学校では、市交通安全協会の協力を得て、小学校３年生の全児童を対象に自転車教室を実施し、正しく安全な自転車の乗り方を学んだ。小学生の交通事故は、対前年比、２件減った。

平成 23 年　市内小学生の交通事故

区　　分	22 年	23 年	前年比
歩　行　中	5	5	0
自転車乗車中	13	11	△2

Ⅲ　生涯学習課

(1) 地域・家庭が一体となって教育力を高める

ア　家庭教育のあり方を見つめ直し、地域と家庭の教育力の活性化を図る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

地域ぐるみで子どもを健全に育成するため、師勝東小学校区及び西春小学校区で行われた「地域ふれあい活動」に対し補助金を交付し支援を行った。

子どもの体験活動では、体験活動ボランティア活動推進事業（わくわく体験教室）を 12 教室開催し、235 人が参加した。

また、きたっこスクール（将棋クラブ・太鼓クラブ）を月２回開催し、将棋クラブには 72 人、太鼓クラブには 43 人が参加した。子ども交流セミナーは大桑村交流会（７月）と北名古屋市交流会（10 月）を開催し、20 人の小学６年生が参加した。

子育て支援事業では、家庭教育のあり方を見つめ直すため、「いきいき子育てセミナー」を７回開催し、延べ 108 人が参加した。

イ　ボランティア活動支援センターを充実し、地域の教育力を高める・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

体験活動ボランティア活動支援センターでは、子ども会や保育園等から依頼のあった 55 事業に対し、ボランティア講師を紹介した。

また、中学生ボランティアは、２事業に延べ 161 人、行政ボランティアは、18 事業に延べ 106 人参加し、事業に対するボランティア活動が定着してきた。

(2) 青少年の健全育成をめざす

ア　次代を担う青少年がのびのびと健やかに成長するように、地域社会が一体となって健全育成活動を推進する・・・・・

評価	A

青少年育成会議、青少年育成運動推進員、少年補導委員会が綿密に連携を図り、少年非行の防止に対する地域住民の理解と関心を高めるため、街頭啓発活動を西春駅及び徳重・名古屋芸大駅において月１回、朝のあいさつ運動を各小中学校において月２回実施した。

また、次代を担う青少年の健全育成を図るため、青少年育成会議大会を開催し、善行少年の表彰、小中学生のポスター・標語の表彰、少年の主張の発表等を行った。

夜の徘徊による非行を防止するため、西枇杷島警察署とも連携し、市内のゲームセンターを中心に、夜間巡視活動を３回行った。

イ　青少年団体の育成に努める・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

青少年団体（ボーイスカウト、ガールスカウト、少年少女

合唱団、少年少女発明クラブ）７団体が円滑な運営を行えるよう、補助金を交付し支援した。それにより、各団体が活発な活動を行うことができた。

ウ　青少年センターの設置・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	ＡＡ

社会生活を営む上での困難を有する青少年を支援するため「青少年センター」を設置し、警察官・教員のＯＢを配置し、「北名古屋市子ども・若者支援地域協議会」を構成する関係機関との連携により、相談・指導・支援及び青少年健全育成を図るための啓発活動を実施した。

(3) 生涯学習活動を支援する

ア　各種講座の充実を図り、生涯学習に関する情報や資料の提供を積極的に推進する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	Ａ

市民の学習意欲の向上を図るため、市民から要望の高い各種生涯学習講座（23 講座、498 人）を開催した。

名古屋芸術大学との連携では、専門的な内容を含む生涯学習大学公開講座（32 講座 361 人、うち北名古屋市民 205 人）を開催し、学習意欲を高める市民向け講座を計画的に行うことができた。

イ　各種講座の修了者に働きかけて、自主サークル結成を促し、地域連帯意識の醸成を図る・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	Ａ

正式に自主サークルとして結成されたのは「オカリナ」・「パン・スウィーツ」講座の２団体だが、「占い」「英会話」など講座後も講師から個人的に指導を受けている受講生は多い。継続的な指導となれば、サークルへの発展も望まれる。

(4) 芸術文化活動を通じて豊かな心を育む

ア　市民が気軽に芸術に接することができるよう、名古屋芸術大学との連携により、芸術を鑑賞する機会の充実に努める・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	Ａ

市民芸術劇場を５回開催し、延べ 1,030 人が参加した。今年度は、旧加藤家住宅でアートプロジェクトに合わせて音楽パフォーマンスを実施また、市内商業施設のオープンスペースで１回実施し、多くの市民が気軽に芸術鑑賞する機会を提供できた。

また、名古屋芸術大学が各地で行う公演（20 公演）に市民を招待し、延べ 390 人の市民が鑑賞した。

イ　芸術文化の中心施設として、文化勤労会館の有効活用を図るとともに、市民ニーズにあった事業を実施する・・・・・

評価	A

芸術文化活動の拠点である文化勤労会館は、年間 120,215 人（１日平均 386 人）の利用があり、61 団体を有する文化協会の中心的活動施設として、また、オーケストラや吹奏楽団など音楽団体の定例活動の場として有効利用が図られている。

文化勤労会館では、８月にパペットフェスタ、12 月に北名古屋市民音楽祭が行われ、パペットフェスタには延べ 3,012 人、音楽祭には 535 人の入場があり、多くの市民に親しまれる行事として定着している。

(5) 市民に親しまれる図書館をめざす

ア　図書館を市民の文化生活の足場にする・・・・・・・・・・

評価	A

２つの図書館で 271,572 冊の図書資料、14,269 点の視聴覚資料をそろえ、各種資料を 152,102 人の方に 672,766 点を貸し出しした。また、年間 505,846 人が入館し、市民１人当たりでは、6.1 回の利用があり、文化・生涯学習の場となった。

イ　利用者から求められた資料は、すみやかに提供する・・・

評価	A

館内 OPAC(蔵書検索端末)を利用した利用者からの資料要求、相談には専門的知識や資料検索を活用して的確に対応した。所蔵していない資料は、購入または相互貸借により愛知県図書館をはじめ、県内の図書館等から借用して提供した。

予約冊数	リクエストにより購入	相　互　貸　借	
		愛知県図書館から借用	その他図書館から借用
15,664 冊	810 冊	442 冊	1,013 冊

ウ　児童と本を結びつけ、読書の喜びを提供する・・・・・・

評価	A

保育園・幼稚園・小学校からの図書館見学を通して、図書館の利用の仕方を説明し、本に親しみを持ってもらった。絵本や紙芝居の読み聞かせ会を 67 回実施した。また、ブックスタート事業として、883 人の 10 か月児に、絵本を介して心触れ合うひとときをもつきっかけづくりを行い、絵本をプレゼントした。

児童書の蔵書数は、次のとおりである。

絵本	紙芝居	文学	その他	合計
38,227 冊	1,738 冊	27,641 冊	24,122 冊	91,728 冊

(6) 文化財の保護と資料を収集・活用する

ア　特別展・企画展の充実を図り、資料の公開を積極的に推進する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	ＡＡ

歴史民俗資料館には、市内外より年間 36,990 人の入館があり、１日平均 128 人が来館された。来館者の特徴として、高齢者施設、デイサービスの利用が増加し、年間 250 件を超えている。

特別展では、「市民ミュゼ」と題し市民の参加を得て展示会を開催し、市民協働の重要性を伝えた。

また、山形県上杉博物館、日本郵政資料館、四日市市博物館などに展示協力を実施し好評を博した。

イ　貴重な文化財を後世に伝えていくことの大切さを広く伝えることにより文化財保護を推進する・・・・・・・・・・・

評価	Ａ

43 件の指定文化財の管理に対して 1,584 千円の補助を行い、文化財保護に努め、加えて多くの文化財の管理者による公開を実現した。小学校５～６年生で構成する文化財愛護少年団の活動を通じて、次世代の保護者の育成を図った。

また、埋蔵文化財保存活用事業として、出前博物館用解説パネルを活用し小学校において出前博物館を実施した。

ウ　回想法を用いて高齢者のケア、介護予防事業に取り組む・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	Ａ

高齢者施設等の「昭和日常博物館」の見学を促進、歴史民俗資料館所蔵の資料の貸出しなどにより、回想法の一翼を担った。旧加藤家住宅と併設された回想法センターには、8,939 人の来館者があった。

また、旧加藤家住宅において名古屋芸術大学と連携を図り「旧加藤邸アートプロジェクト 2011－記憶の庭で遊ぶ」を開催し、1,250 人の見学を得た。

Ⅳ　スポーツ課

(1) 生涯スポーツの振興を促進し、市民の体力の向上を図る（スポーツ・レクリエーション活動の更なる充実をめざすとともに地域住民主体のスポーツ振興を促進する）

ア　親子水泳教室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

親子水泳教室については、親子でふれあいながら楽しく参加できる教室として４日コースで開催し、親子で 13 組、30 人の参加者があり、水に親しむ素地をつくることや水泳への苦手意識の克服、水泳の楽しさを伝えることができた。

また、参加者からアンケート調査を行った結果は下記のとおりであった。

配布枚数	13 枚	回収枚数	12 枚	回収率	92.3%

アンケート結果

設　問　内　容	適　切	普　通	良くない
会場について	10 人		１人(広い)、１人(狭い)
参加人数について	９人		２人(多い)
対象者について	７人		５人(年齢､クラス分け等)
指導について	10 人	１人	
開催日数について	８人		２人(少ない)、１人(多い)
開催時期について	10 人		２人(８月上旬に)

※　アンケート結果から「適切」との回答が全体の 78.3%となった。

イ　少年・少女バスケットボール教室・・・・・・・・・・・・

評価	AA

バスケットボールの基礎的技術の習得と子どもの体力向上を図る教室として４回コースで開催し、40 人の参加者があった。トップレベルのコーチ指導により、しっかり技術を習得させることができた。

また、参加者からアンケート調査を行った結果は下記のとおりであった。

配布枚数	40 枚	回収枚数	29 枚	回収率	72.5%

アンケート結果

設　問　内　容	適　切	普　通	良くない
会場について	20 人		８人(広い)
参加人数について	25 人		４人(多い)
対象者について	26 人		１人(小･中学生で分ける)
指導について	26 人	３人	
開催日数について	20 人		９人(少ない)
開催時期について	24 人		３人(７月下旬)、２人(８月上旬)

※　アンケート結果から「適切」との回答が全体の 82.5%となった。

ウ　市民体育祭の運営が充実するよう支援する・・・・・・・・

評価	A

市民体育祭については、市民体育祭実行委員会を組織し、手作りの企画、運営による市民にとって身近な体育祭として開催した。約 3,100 人の参加者があり、多くの市民が一堂に会してコミュニケーションや親睦を図るとともに、スポーツ・レクリエーションに関する興味、関心を高めることができた。

エ　愛知県市町村対抗駅伝大会への積極的な参加を図る・・・

評価	A

2005 年に開催された「愛・地球博」の理念を次の世代へ語り継ぐメモリアルレースとして開催され、この大会に参加するため選考会を開催し、小・中学生、ジュニア（高校生）、一般、40 歳以上と幅広い年齢層の男女で北名古屋市チームを編成し大会に参加した。

オ　全国大会等出場者を発掘する・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

全国大会等出場者を発掘し、出場者本人の士気高揚、自信と誇りをもっていただくため、３団体 31 人に市長から激励を行った。

(2) スポーツ・レクリエーション団体の育成の充実を図る

ア　体育協会組織の充実をめざす・・・・・・・・・・・・・・・

評価	A

体育協会（加盟 19 団体、3,679 人）の組織の充実に向け補助金を交付し、新春チャレンジマラソン大会、スポーツ講演会、各種スポーツ教室、春・秋季体育大会（延 11,119 人参加）等々の活動に支援をした。

また、毎月、常任理事会、理事会を開催し活動内容及び組織の充実を図った。

イ　レクリエーション協会活動の充実を図る・・・・・・・・・

評価	A

レクリエーション協会（加盟 11 団体 287 人）に補助金を交付し、全国一斉「あそびの日」、レクリエーション誕生祭、スポ・レク祭、ウオーキング＆芋煮会（延 1,415 人参加者）等々の活動に支援した。また、自治会を始め多くの団体からレクリエーション講師の派遣依頼や出演依頼（83 件 710 人）があり年間を通じ活発な活動を行うことができた。

ウ　ふれあいスポーツクラブの育成に努める・・・・・・・・・

評価	A

スポーツクラブ（鴨田、西春、白木、五条、栗島、東の６スポーツクラブで会員総数 1,415 人）では、子どもから高齢者までが「いつでも、どこでも、いつまでもスポーツを楽しむ」ことを目的に活動しており補助金を交付し支援したことにより、１日型イベント（延参加者 14,808 人）、常時活動の教室（36,397 人参加）、講習会（571 人参加）等の事業を活発に行うことができた。

また、定期に６スポーツクラブ連絡会議、理事会を開催し、活動内容及び各スポ

ーツクラブの連携を図った。

エ　体育指導委員（スポーツ推進委員）及びスポーツ振興委員（スポーツ地域委員）の育成に努める・・・・・・・・・・・

評価	A

指導者養成講習会等、研修の内容を充実させ、高い専門的知識、技能、資格を有する指導者の養成と確保を行った。

(3) 社会体育施設の有効利用を図り生涯スポーツの推進をする

ア　社会体育施設を拠点としたスポーツ活動の推進・・・・・

評価	A

社会体育施設の年間利用者は延べ557,257人であった。

生涯スポーツ社会の実現やスポーツ振興の視点に立った総合型地域スポーツクラブ、体育協会、レクリエーション協会の活動の拠点として、健康志向の高まりや市民のスポーツへのニーズに対応し、気軽に利用でき、レクリエーション活動を活発に行える「場」を提供することができた。また、総合体育館、健康ドームの利用者にアンケート調査を行った結果は、下記のとおりであった。

総合体育館

配布枚数	30枚	回収枚数	20枚	回収率	66.7%

アンケート結果

設　問　内　容	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	無回答
施設・設備の充実度	３人	８人	７人	１人	０人	１人
利用のしやすさ	４人	５人	10人	１人	０人	０人
利用日、利用時間	４人	８人	７人	１人	０人	０人
利用料金	２人	５人	11人	２人	０人	０人
職員の対応	５人	６人	８人	１人	０人	０人

※　アンケート結果から「満足」と「やや満足」との回答が全体の50.0%となった。

健康ドーム

配布枚数	40枚	回収枚数	29枚	回収率	72.5%

アンケート結果

設　問　内　容	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	無回答
施設・設備の充実度	16人	８人	２人	１人	０人	２人
利用のしやすさ	15人	６人	５人	３人	０人	０人
利用日、利用時間	16人	４人	５人	１人	１人	２人
利用料金	14人	10人	５人	０人	０人	０人
職員の対応	16人	３人	８人	０人	０人	２人

※　アンケート結果から「満足」「やや満足」との回答が全体の74.5%となった。

社会体育施設の年間延べ利用者数

総合体育館	193,146 人
健康ドーム	223,497 人
ジャンボプール	38,977 人
市民プール	22,962 人
二子テニスコート	34,147 人
市民グラウンド	18,488 人
ソフトボール球場	26,040 人
合　計	557,257 人

イ　学校施設を市民のスポーツ活動の場として開放・・・・・

評価	A

学校体育施設には、小中学校 16 校の運動場及び体育館があり、運動場は年間延べ 6,996 回開放され、その内 5,648 回（利用率 80.7%）の利用があった。

また、体育館は年間延べ 9,458 回開放され、その内 5,695 回（利用率 60.2%）の利用があり、学校体育施設は、地域住民の身近な施設であり、手軽にスポーツ活動を行う場として、生涯スポーツ振興の一翼を担った。

学校施設年間利用回数

区　分	運動場	体育館	武道場	テニスコート
小学校	4,307 回	4,172 回		
中学校	1,296 回	1,523 回	356 回	1,300 回
西春高校	45 回			